九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

Absalom, Absalom!のコミュニティ

内田, 智子
九州大学大学院文学研究科 : 博士課程

https://doi.org/10.15017/6786954

出版情報：九大英文学. 32, pp.197-210, 1989-11-20. The Society of English Literature and Linguistics, Kyushu University
バージョン：
権利関係：

Absalom, Absalom! のコミュニティ

内　田　智　子

'Tis the Majority
In this, as All, prevail——
Assent——and you are sane——
Demur——you're straghtway dangerous——
And handled with a Chain——

Emily Dickinson

I

William　Faulkner の大部分の小説はミシシッピ州 Yoknapatawpha 郡 Jefferson のコミュニティという一種独特な舞台設定を持っており、Cleanth Brooks が長い間言明してきたことを引合に出すまでもなく、このコミュニティがどのようなものであるのかということを理解することが、彼の作品の解釈の上での大きな鍵となっている。[1] ブルックスの言うように、コミュニティとは同じ信念や価値観や態度を共にする集団であるが、[2] コミュニティをどちらかというと大変に肯定しているブルックスの見方は、コミュニティの人間が時として自分たちの価値、基準を守ろうとするあまり、外部者に対して残酷な態度に出ることがあるという事実を、あまり重視していないようである。フォークナーのコミュニティには様々な面がある。フォークナーのコミュニティは、コミュニティ側の、秩序を守ろうとする動きと、コミュニティから孤立する者の、コミュニティの秩序に挑戦する動きのぶつかり合う場所でもある。このジェファソンという町のコミュニティについて、主として『アブサロム、アブサロム！』を例にとりながら、その実体について、また、このコミュニティが作品に占める役割は如何なるものであるのかということ

について考察するのが、本論の目的である。

II

まずはフォークナーの小説に現われるコミュニティ、ここで問題としているコミュニティの定義をしておく必要がある。ブルックスはW. H. Audenの説に従って、人間の集団を“crowd,” “society,”そして“community”という三つに分けている。[3] “crowd”とは、ある場所にたまたま居合わせた人々のことであり、“society”とは経済的な利害がもとで結ばれた人間たちの集団を指し、そして“community”というのが、同じ行動様式やモラルを共にしている人々の集団を指す。つまり、コミュニティとは、ただ、経済的な繋によって結ばれた人々の集団ではなくて、一つの文化、伝統的な信念を同じくする人々の集団であるというのである。そして、ブルックスは、かなりコミュニティの“cultural cohesion”を重要なものとして評価している。しかし、ここで同時に問題となるのは、コミュニティの人々がコミュニティ外の人間にとる態度であろう。フォークナーの描くコミュニティは、その構成員の間では、ある一定の秩序を守った世界であるが、一度外部者によってその秩序が乱されると、コミュニティの人々は外部者に様々な反応を示すのである。時により彼らは暴力的なやり方で外部者に接する。つまり、ブルックスの定義に更に付け加えて、コミュニティとは、その構成員、受け入れられる側にとっては、文化や伝統を共にする重要な場であるが、一方そこに受け入れられない側にとっては、その孤独をもたらすもととなりうるものでもある、と言わねばならぬであろう。

さて、『アブサロム、アブサロム！』では、Thomas Sutpenが先程から問題にしている「外部者」に区分されることは明らかである。サトペンが1833年、どこからともなくジェファソンに現われた時、町はこの見知らぬ男の話題で騒然となった。当時のジェファソンはまだ家も少なく、[4] フロンティア時代を思わせるコミュニティであるが、[5] その噂好きの態度は、後の *Light in August* の時代のジェファソン(1932年)[6]とそう変らない。サトペンが町に来てから、町の人々はこの外部者の「身辺調査」を始め、サトペンの過去を探

ろうとする。しかし、サトペンの過去は、サトペンの唯一の友人であった(p. 220) Compson 将軍以外には殆どわからない。則ち、「町の人たちは、. . .彼をつかまえ、彼が誰で、どこからきて、何をしているのか、話させようとして迫り、柱か壁にまでじりじりと追いつめるのだったが、追いつめられても、彼はホテルの番頭のように如才なく、いんぎんに、話すことをことわった」(p. 25)のである。それが一層、彼らの興味を掻き立て、サトペンの身辺についての様々な憶測が飛び交うことになる。

サトペンが町の者たちから隠していた彼の「過去」とは次のようなものである。則ち、サトペンは西インド諸島のハイチ島で砂糖きび農園主の娘と結婚していたが、妻に黒人の血が混じっていることを知り、彼女と息子を捨てて、ジェファソンにやって来たのであった。サトペンには、彼が "design" (p. 212) と呼ぶ、「いつか大邸宅の主人になる」という夢があって、彼はハイチを去った後、他所で新規巻返を計ろうとしてジェファソンに来たのである。町の者たちには以上のことなどわかる術もない。だからいきなりやって来て、町の外の100平方マイルもの土地をインディアンから手に入れるこの男を、彼らが疑をもって見始めるのは、当然のことであるのかもしれない。彼らの一人は、一旦サトペンがジェファソンで土地を確保してから、再びジェファソンに戻って来た時、サトペンの馬車の幌の下をわざわざ覗いて、黒人奴隷が乗っているのを見つける。

> Apparently it was only by sheer geographical hap that Sutpen passed through town at all, pausing only long enough for someone (not General Compson) to look beneath the wagon hood and into a black tunnel filled with still eyeballs and smelling like a wolfden. (pp. 26－27)

彼らの噂好きの態度は、やがてこの黒人奴隷たちについての様々な憶測を生む。それらは "the legend of Sutpen's wild negroes" (p. 27) などと呼ばれ、サトペンが屋敷を建てるのをわざわざ馬で見に行く男たちが町に伝えて来たものである (p. 27)。英語圏でないハイチ出身のサトペンの奴隷たちは、

当然英語を喋らず、一種のフランス語を喋っていたが、その言葉が一種のフランス語であると解せぬ人々は、その言葉も、「かれら自身の謎のようなはかり知れない土語」(p. 27)であると思ってしまう。その上、サトペンの黒人奴隷は「どんな獣よりも、ずっと狂暴」(p. 28)であるなどと思われていたのである。このように、町の人々は、自分たちがよくわからないことに、自分たちで勝手に理由をつける。

町の者たちが、疑をもってサトペン屋敷が建っていくのを眺める様子を、フォークナーはユーモアのセンスを働かせて書いている。第2章には、「かれらは夜明けから日暮れまで働き、それを、多くの騎馬の人たちが町からやってきては、黙って馬にまたがったまま見まもっていた」(p. 28)とある。さらに、Rosa Coldfieldによると、彼らはしばしば「弁当持参」であったということである(p. 27)。町の者たちは何と物好であることであろう。サトペンの屋敷が建つと、ここに男たちが集まり、サトペンと酒を酌み交すようになる。ところがこれも、彼らは物好で行っていたようであり、一旦サトペンの立場が町から孤立したものになると、誰も出掛けなくなってしまう(p. 32)。フォークナーはこのような出来事をコミカルな事件として、サトペン物語の陰鬱なトーンに対抗する要素として書いている。一体、ある物語を強調するのに、その物語の反対のトーンを持ち出すこと程、強調することがあるであろうか。『八月の光』に於ても、フォークナーは、Joanna Burdenを殺した後のChristmasの絶望的な逃走を強調して描くために、彼を捕まえに行く保安官一行のどじぶりを、非常にコミカルなタッチで描いている。[7]

屋敷を建ててから3年経ったある日、メソジスト教会へこれまたいきなりサトペンが入ってゆくと、男たちは驚いたが、女たちは持参金付きの花嫁を探しに行ったものと思い平然としていた。ところがサトペンの近づいた相手は、サトペンとは金銭の面では何の共通点もありそうにない（と町の人々は考えていた）メソジスト教会の執事をしているGoodhue Coldfieldという男である。そこで彼らは、サトペンがコールドフィールドを何らかの形で利用しようとしていると思い込み(p. 32)、コミュニティの意識を発揮して「外部者」サトペンを敵に回すようになる。その頃迄に、町の人々はサトペンをよく観察し、彼らなりの結論を出して、今や彼らはサトペンという男を知って

いると思っていた（p. 31）。しかし実際は、サトペンは彼らの考えを裏切り、彼らには殆ど理解できぬことをしていたのであり、そこで町の者たちが彼をよく知っていると信じ切っていた思わくは完全に覆された。

コールドフィールドという人物について、当時の町の意見と、後に Mr. Compson, Quentin らが推測する話との間に、かなりのギャップがあるのは見落せない事実である。一体コールドフィールドとは如何なる人物であるのか。当時の町の者たちの彼の見方はこうであった、「適度な地位と境遇にあり、十年前に、一台の馬車で、ジェファソンの町に持ってきた商売の収入で、自分の妻と家族と、母と妹とを養っている一商人で、メソディスト教会の執事をしている男――飲みもしなければ、博打もうたず、狩猟さえもしない、無法の国で、無法な時代に生きながら、絶対的な、不惑の、清教徒的な正義心に燃えている男」（p. 32）。ところが実際は、彼は町の者たちに内緒で、サトペンと裏で取引をしていたというのである。第3章では、サトペンが、コールドフィールドが生きている間は秘密だということにして、コンプソン将軍だけに、彼ら二人の間には何らかの関係があったということを打ち明けている（p. 49）。また同じ章で、将軍の息子のコンプソン氏は、コールドフィールドが“close-trading,” また “dishonesty” をしていたと仄めかしている（p. 65）。極め付けが、第7章のクェンティン、Shreve によるサトペン物語の再構築に現われるコールドフィールド像である。おそらくコンプソン将軍からコンプソン氏に語られ、それがクェンティンに伝わったのだろうが、クェンティンは、「誰も確かなことはわからないが」としながらも、この二人は船荷証券のことで不正な取引をしていたらしいと語っている（p. 208）。彼は闇商売の考えを長年断ち切れなかった、というのである。こうして、町の人々のコールドフィールドの見方は間違っていたということがわかる仕組になっているのである。

そういうわけであるから、ある人物がサトペンの「犯罪」を考え出すと、それが忽全ての世論を動かしてゆくことになる。Akers という猟師が “Boys, this time he stole the whole durn steamboat!” （p. 34） と言うと、証拠もないのに、町の人々は憤り、そのうち8－10人の一団が保安官と共に馬に乗り、サトペンのところに出掛けてゆく。この両者の出会うシーンは、二つの

全く違う価値観を持つ者のぶつかり合う場面として重要な意味合いを持つものであろう。則ち、尊大に構え、その顔付を見れば誰もが“*Given the occasion and the need, this man can and will do anything*”（p. 35）と思うであろうサトペンと、何の確たる証拠もないのに、サトペンに疑のまなざしを向ける町の者たちとが出会うのである。

その日、サトペンはコールドフィールドの娘 Ellen と婚約した後、コールドフィールドの家を出るといきなり逮捕される。彼の逮捕に集まった人間の数は「50人程」[8] であったという（p. 35）。サトペンはコンプソン将軍とコールドフィールドが保釈証書にサインして保釈されたが、この二人がいくらかでも、サトペンの背景を町の人よりも知っている人物であるというのは興味深い。そして、町の人たちに「廉潔な人物」と見られているコールドフィールドがサインしたことは、町のサトペンに対する信用を高めた（p. 39）。このように、町の判断はかなり恣意的であると言わざるを得ない。

他にもコミュニティの人々が、サトペンのすることに、異常なまでの興味を示す事件がある。サトペンのところからフランス人の建築家が逃げた時、彼を捕まえるのを見物するために、町の男たちは“guests”（p. 178）として町から集まって来ている（pp. 197，206）。また、サトペンの結婚式の後、町にやって来た流れ者がゴミあくたをサトペンに投げつけるのを、町の者は集まって来て馬車から黙って眺めている（p. 44、これらの町の人々のことをフォークナーが“Roman holiday”を見に来た人たちと書いているのは大変なブラック・ユーモアである）。

さてここで、コンプソン将軍のことについても一言しておく必要がある。先に述べたように、コミュニティの視点は個人の背景について誤解をしていることが往々にしてあるのであるが、この誤解した視点を正す役割を持っているのがコンプソン将軍である。コンプソン将軍は町の人たちと違って、サトペンの唯一の友人であり、そのために町の人たちの知らないことをも知る立場にある。フォークナーは特に第2章に於て、町の人々の誤解の視点を示すと同時に、コンプソン将軍だけは、町の者たちの知り得ないことをも知っていたと明確に記している。そして、そのコンプソン将軍の知っていたことが、彼の子コンプソン氏、また更に孫のクェンティンに伝わり、この小説が

成立するのである。コールドフィールドのイメージのギャップについては既に述べた。もう一つ例をあげてみよう。サトペンが屋敷を建てた後の3年間に対する町の人々と彼の視点には、以下のような差があったのである。

> Perhaps it is not to be wondered at that the men in the county came to believe that the life he now led had been his aim all the time; it was General Compson, who seemed to have known him well enough to offer to lend him seed cotton for his start, who knew any better, to whom Sutpen ever told anything about his past. It was General Compson who knew first about the Spanish coin being his last one, as it was Compson (so the town learned later) who offered to lend Sutpen the money to finish and furnish his house, and was refused. (pp. 30－31)

また、例のフランス人の建築家に対しても、コンプソン将軍は唯一人、思いやりのある態度を持ち、彼が捕まった時、彼にウィスキーを飲ませたり、彼が紛失した帽子を与えてやったり (p. 206) する。彼は他の町の者たちと違って、集団心理的、不和雷同的な見方をしない。サトペンの黒人奴隷の乗っている馬車を覗いたのは「コンプソン将軍ではない誰か」であった (p. 27)。彼はサトペンの結婚式に出席した数少ない人間の一人であり、「自分の階級の狭さを越えている」。[9] Lind の言うように、「彼にはサトペンの性格の限界がわかっているが、人間的な愛情に於て彼から離れない」[10] のである。つまりサトペンにとって、コンプソン将軍は外部者を必ずしも歓迎しないコミュニティの中にあって、唯一話を聞いてくれる人間であったわけである。こうして、前に述べたように、コールドフィールドとサトペンの関係について唯一人打ち明けられたのもコンプソン将軍なのであった。しかし、町の人と違う視点を持っているコンプソン将軍の視点にも限界がある。第6章の後半で、シュリーヴは、コンプソン将軍にもサトペンの孫の Charles Etienne St.Valery Bon について「明らかにすることができなかった」点が多々あったと言っている (pp. 159－69)。則ち、

> Your [Quentin's] grandfather didn't know, even though he did know more than the town, the countryside, knew, which was that there was a strange little boy living out there who had apparently emerged from the house for the first time at the age of about twelve years, ... (p. 163)

というのである。サトペンはコンプソン将軍に全部を話したわけではなく、またコンプソン将軍も息子のコンプソン氏に全部を語ったわけではない (p. 214)。かくして、クェンティンがローザ・コールドフィールドとサトペン荘園に出掛けた時 (pp. 290－98) の情報も加えて、クェンティンとシュリーヴが推理する余地ができてきたのであった。

III

是迄、『アブサロム、アブサロム！』に登場するジェファソンの町のコミュニティの様々な面を観察してきたのであるが、ここでコミュニティの、外部者に及ぼす影響についてもっと考えてみよう。まず、もしコミュニティが是迄見てきたように間違った見方を外部者に対してしているなら、コミュニティに自己中心的な、またそのために外部者を迫害する面があることは否定できない。第2章では、フォークナーはコンプソン氏にこう言わしめている。

> [S]o had vanity conceived that house and, in a strange place and with little else but his bare hands and further handicapped by the chance and probability of meddling interference arising out of the disapprobation of all communities of men toward any situation which they do not understand, built it. (p. 39)

この "meddling" とは、サトペンが屋敷を建てていた時、町の男たちが弁当持参で見物に来ていた様子なども指すのであろう。こうなると、コミュニテ

ィが認めることでなければ、外部者は自由に活動ができないということになるではないか。コミュニティの人々は、「外部者」が一度自分たちに害を及ぼすらしいとわかると、迫害するのである。第2章では、コンプソン氏が、社会に「消化」されない個人が社会に深く影響を受けざるを得ないことを、次のように表現している。

> He [Sutpen] doubtless remembered even better than Mr Coldfield that two months ago he had been in jail; that public opinion which at some moment during the five preceding years had swallowed him even though he never had quite ever lain quiet on its stomach, had performed one of mankind's natural and violent and inexplicable volte faces and regurgitated him. And it did not help him any that at least two of the citizens who should have made two of the teeth in the outraged jaw served instead as props to hold the jaw open and impotent while he walked out of it unharmed. (pp. 39－40)

一方コミュニティの態度はまた、非常に現実的でもあり、一度外部者が公共の秩序を乱さぬとわかれば、またコミュニティの人々が納得するような事態に至れば、何も害を加えない。サトペンに金があるとわかると、コミュニティはおとなしくなる。

> He [Sutpen] was not liked (which he evidently did not want, anyway) but feared, which seemed to amuse, if not actually please, him. But he was accepted; he obviously had too much money now to be rejected or even seriously annoyed any more. (p. 57)

『八月の光』に於ても、Doc Hines という人物は町の人たちに変人として特別視されていたが、彼が"old man and harmless"[11]であるので、町の方も

別に彼に干渉しない。このように、コミュニティはその秩序を守るために、ある程度外部者たちに圧力をかけるものなのである。

ところが一方サトペンの方にも、コミュニティの秩序の壊し方に問題があったと言えないであろうか。先の引用に於ても、サトペンは public opinion の「胃」の中で静かにしていなかった、とあったが (p. 39)、サトペンの孤立は、サトペンの方にもまたその原因があったとフォークナーは仄めかしているようでもある。サトペンが必死で屋敷を建てるその一途さは町を無視するような結果を招いた。

> He was the biggest single landowner and cotton-planter in the county now, which state he had attained by the same tactics with which he had built his house——the same singleminded unflagging effort and utter disregard of how his actions which the town could see might look and how the indicated ones which the town could not see must appear to it. (p. 56)

この文でもわかるように、サトペンとコミュニティの間で問題が起ったのは、サトペンが実際にコミュニティの目の前で起した行為のためだけではなく、起していると町に思われていそうな行為のためでもある。ということはつまり、サトペンとコミュニティの間には、サトペンの実像をめぐって大きな意見の差があったのであり、サトペンがコミュニティに自分の素性を隠さなければ、この両者の間には問題がそれ程起らなかったのではないかとも考えられるのである。ミシシッピ州ヨクナパトーファ郡ジェファソンは南部の片田舎の小さな町であるが、この町のコミュニティの価値観を、一概に全て因習的なものと裁断して良いものであろうか。私たちはサトペンの側にも問題を起す要因があったことを見落すべきではない。彼の「隣人(となりびと)」を完全に無視する姿勢が傲慢でなくて何であろう。

また、コミュニティはその構成員に対しては親切である。アメリカ深南部の「人情」がそこには描かれていると言っても良いかもしれない。身よりのない人たちでも、そのコミュニティが良く知っていれば、そのコミュニティ

の世話から洩れることはない。晩年、一人暮をすることになるローザ・コールドフィールドに対しても、町の人たちはどちらかというと暖かい目を向けている。彼女がサトペンから屈辱的なことを言われてサトペン荘園を後にし、町の家に帰って来ると、町の者たちは彼女について、"Rosie Coldfield, lose him, weep him; caught a man but couldn't keep him" (p. 136) と冷かす。しかしそれでも、「みなさんもご親切です」(p. 136) とローザ自身が言っているのである。そして、町の人々は、ローザの身の振り方を相談するために集まり、彼らの暗黙の了解を得て、Benbow 判事が進んで財産譲渡執行人になったということである (p. 171)。また、町の人々は彼女のために彼女の家に食物を届けたり (pp. 138, 171)、彼女が他の家の垣根に手を入れて青物を引き抜くのを黙認したりする (p. 138)。それは他でもない、彼女に身よりがないことを彼らが知っているので、皆が彼女の窮乏を無視することができないからであった。このことは『八月の光』の Hightower のことにもよくあてはまる。コミュニティとの様々な衝突を経た後、妻を亡くしたハイタワーがこの町に居ついて離れないらしいとわかると、町はこの身よりのない変人の元牧師と「和解」する。[12] また、Lena Grove にも同じことが言える。従順な彼女はこのコミュニティに何ら害を加えないので（対照的なのは常に反抗的な態度に出るクリスマス）私生児を産むというのに結局は町もそう彼女を咎めず、彼女は無事に子供を産み、旅を続けてゆくのである。

このように、コミュニティは、そこに現われる外部者によって、態度を変えるということができるであろう。コミュニティが外部者にかける圧力と、外部者がコミュニティの秩序を乱す動きの釣合がとれない時に、問題は起こるようである。

IV

『アブサロム、アブサロム！』に於てフォークナーは、コミュニティとサトペンとの間の問題を描くことにより何を言わんとしているのか。一つには、サトペン物語の陰鬱なトーンに対抗するコミカルなトーンをコミュニティを登場させることによって描き出している。それから、町の者たちの、個人に

対する誤解を描くことにより、町の見方の恣意性を表わしている。さらに、フォークナーはこの町との衝突は、サトペン側にも責任があったことを示し、町は害を加えない者に対しては比較的親切であると述べている。サトペン物語は“innocent”(p. 185)[13] なるサトペンが、天と人とを省みず、自らを神の座に据えるが如き傲慢さでもってのし上がろうとして滅ぼされる物語である。サトペンの“demon”(p. 145) らしい孤高さは、コミュニティとの衝突という背景に於て一層強調されるものであろう。コミュニティを描くことは、このように『アブサロム、アブサロム！』に於ても、サトペン物語の悲劇性を明確にする働きをもっている。

ブルックスは、フォークナーのコミュニティは「聖者のコミュニティではない」と言っているが、[14] その通りである。コミュニティの人々は基本的に親切であろうが、また同時に彼らは人間であり、人間としての弱さを持つ集団であり、真理をいつも見抜く目を与えられているのではない。そこで彼らは集団で残酷なこともやるのである。この点に於て、フォークナーのコミュニティは大変に人間的な、普遍性を持つものであるのである。普段は平和な町なのに、クリスマスにいきり立つジェファソンの町は、ちょうど2000年前エルサレムの町にイエスが入城した時「ダビデの子に、ホサナ」と喜んでいたエルサレムの人々が、その何日か後には「十字架につけよ」といきり立っていたことさえ、思い出させる。フォークナーのコミュニティには、そのような人間性のエッセンスがつまっている。外部者とコミュニティとの対立、コミュニティに於ける集団心理、コミュニティの親切さ、コニュニティから離された個人の孤立、そして個人のコミュニティに対する反抗。これらの問題を、フォークナーはジェファソンの町を舞台にして、描いているのである。

NOTES

1 Cleanth Brooks, “Faulkner and the Community” in *On the Prejudices, Predilections, and Firm Beliefs of William Faulkner* (Baton Rouge, La.: Louisiana State University Press, 1987), pp. 29－43.

2 *Ibid*., p. 31.

3　*Ibid*., p. 30.

4　William Faulkner, *Absalom, Absalom!: The Corrected Text* (New York: Random House, 1986), p. 24. 以下、この作品からの引用は全てこの版により、引用頁は本文中に示す。尚この作品の訳は『フォークナー全集 12』（東京：冨山房，1968）の大橋吉之輔氏のものを参考にさせていただいた。

5　Brooks, "Faulkner," p. 39.

6　『八月の光』の「現在」を1932年とした根拠については、Faulkner, *Light in August* (1932; rpt. New York: Random House, 1959), pp. 443, 44, 465 参照。 p. 443 にはハイタワーの父が1865年に南北戦争から帰ったこと、その時彼が着ていたフロックコートが25年間しまってあったこと、そしてそのフロックコートを 8 歳のハイタワーが出して見ていることが記されているので、ハイタワーの生まれた年は1882年と推定される。そして更に p. 44 にはハイタワーが "fifty-year-old outcast" であるとあり、また、p. 465 でもハイタワーが "[F]or fifty years I have not even been clay: . . ." と言っているので、ハイタワーの現在の年齢は50歳であると判明する。以上のことから計算した。尚、Steven Meats は Burden 家のクロノロジーなどから「現在」の年を1932年と計算する方法も紹介している。Steven Meats, "The Chronology of *Light in August,*" in *William Faulkner's* Light in August: *A Critical Casebook*, ed. François L. Pitavy (New York: Garland Publishing, Inc., 1982), pp. 234－35.

7　Faulkner, *Light*, 第14章参照。前半 pp. 302－13には保安官一行の大騒ぎが、後半 pp. 313－21にはクリスマスの必死の逃亡と、逃亡を諦める様子が描かれている。

8　Cf. David Paul Ragan, *William Faulkner's* Absalom, Absalom!: *A Critical Study* (Ann Arbor: UMI Research Press, 1987), p. 37. レーガンはこの人数は1830年代のジェファソンの大きさから見て誇張であるのは確実であろうと言っているが、それにしても、実に男の町民殆ど全員が逮捕されたサトペンの後を、裁判所までぞろぞろついて行ったようである（"the rest of the able-bodied men left their offices and stores to follow, . . ."(p. 36)）。

9　Ilse Dusoir Lind, "The Design and Meaning of *Absalom, Absalom!,*" in *William Faulkner: Three Decades of Criticism*, ed. Frederick J. Hoffman and Olga W. Vickery (1960; rpt. East Lansing, Mich.: Michigan State College Press, 1969), p. 284.

10　*Ibid*., p. 284.

11　Faulkner, *Light*, p. 323. 尚、ハインズの住んでいた町はジェファソンの近くのMottstown であり、ジェファソンではないが、この町の人たちの噂好きの態度は、ジェファソンのそれと変らない。

12 *Ibid*., p. 67.

13 サトペンの "innocence" は、自分の置かれた状況がわからず、他人を省みないことを指しているようである。ブルックスは、町の人たちはサトペンの"innocent disregard of accepted values" を分かち合いはしない、と言っている。Brooks, "History and the Sense of the Tragic (*Absalom, Absalom!*)," in *William Faulkner: The Yoknapatawpha Country* (1963; rpt. New Haven, Conn.: Yale University Press, 1966), p. 297.

14 Brooks, "Faulkner," p. 42.